
神創兵器エレクシエスト -truth-

鯖味噌汁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神創兵器エレクシエスト - truth -

【Zマーク】

Z8563F

【作者名】

鯖味噌汁

【あらすじ】

神崎志隆と時野神子の死生物指定による監禁。まだ物語はオヴィルの手の中についた。だが、その計画が何の前置きも無しに崩れ去つていく・・・・・・

エレベーターの天井に何かが落ちてきた音がした。

手錠が自動的に外れる。

「・・・ねえ」

「何

「これって・・・僕達が死生物だつてことが、勝手に決め付けられたんだよね」

「そういう・・・」と・・・ね

監禁。

予想できることではあった。

ただ、実際にそうなつていても妙に実感が湧いてこなかつた。

「超法的機関・・・か。

人権も無視できるんだね」

「・・・そのようね」

志隆が見ていたのは棚に入つた銃。

多分、入つている弾は一発だけ。

志隆はそのまま探索を続けるが、私は何もしなかつた。
どうせ、一ヶ月もいればどこに何があるかなんて、意味がなくなつてしまふ場所だから。

「とりあえず、どっちで寝るかは決めとく?」

「・・・条件はほとんど一緒だけど」

どちらかを選ぶ元気もなく、入り口側が私、奥が志隆となつた。
志隆がテレビをつけよつとしていた。

「・・・ついた」

映し出されるのは見たことのある場所。

指揮室だった。

よく見れば近くに番号を押す場所が無い電話機と、テレビの上に小さなカメラがあつた。

「他のチャンネルもあるみたいだね」

志隆があるニュース番組で止まる。

「・・・は、吉良風市上空より佐藤リポーターです。佐藤さん？」

テレビが巨大なクレーターを映し出す。

「・・・はい！佐藤です！」

ヘリコプターの爆音のせいで、リポーターはかなり強い口調で話していた。

「ご覧いただけますでしょうか！吉良風市内で地震のために突如出現した巨大なクレーターです！

五十年前の広島のように、瓦礫もなく、ただの砂地が広がっています！

付近には別の局のヘリコプターも多数飛び交っており、ものものしさを感じさせます！

さらに、今回の地震では前回などよりも復旧活動が遅れており、各地から自衛隊が派遣されている模様です！

以上、現場からでした！」

カメラがスタジオへと移る。

「斎藤さん、これら一連の事件についてどう思われますか？」

「私は地質学者ではないのでどうとも言えませんが、震度7以上の地震が同じ場所、しかも、一部地域に多発するとは素人といえども思えません。

何か裏があるような気がしてなりませんね。

とにかく今は、復興を早く願うばかりです

「ありがとうございました。では次

志隆はリモコンでテレビの電源を切った。

「つ・・・くつ・・・やつ・・・めつ！」

私は志隆を蹴り飛ばすと、支流は壁に激突せずに受け身をとり、四足で立ち上がった。

もう何もかもどうでもよくなっていた。

でも・・・志隆だけには死んでほしくなかつた。

「もう・・・十七回田・・・よ」

五回田あたりだつただろうか。

私の首は妙な痛みを発するようになつていた。

「時野、もう無理だよ。助からないし、死ねないんだよ僕ら」「無数に散乱した食物。

・・・汚い。

でも、こんな環境だと新しいのが来ても食べる氣になれない。

「だからといつて・・・私の首だけ締めても・・・・・・」

「銃弾でも死ねなかつたんだから、こいつするしか方法はないよ」「もう、だめだ。

でも、志隆にだけはせめて最後まで「生きて」ほしい。

そのために、私は志隆のあらゆるストレスを全て受け止めていた。普通じゃなければできることがじゃない。

だから私は「普通」じゃない。

「もう少し、あなたの弾をめり込ませたら、死ねるかもよ」「無理だよ。もう指の届く範囲内はとっくに押し込んでる」

そして、志隆は様々な色に染まつたベッドに横になる。

「もう一度聞いておくけど、洗濯する?」

「もう面倒になつたよ。生きるのも。死ぬのも」

ついに私は彼の体までも受け入れた。

愛なんて文字はどこにもない。

優しさもない。

私の愛も受け取つてくれない。

ただただ、強引で乱暴で。

痛くて痛くてたまらない。

触られるだけでも痛い。

強姦と変わりがない。

私をただの欲を処理するための道具としてしか思つていない。

「やめて」と言いたかった。

でも、言つことができなかつた。

もし、本当にやめてしまつたら、私は彼が意識しているものの存在でさえなくなつてしまつかもしれない。

それが怖かつた。

だからあれからずつとそうしてきた。

・・・え。

止まつた。

志隆が止まつた。

「・・・時野・・・・・」

名前を、呼んでくれた。

時間の感覚はもうなくなつてしまつたけど、最低五十回以上はもう寝ている。

嬉しかつた。

「嫌なら、嫌つて言えばいいんだよ？」

・・・・・・

「もう謝れなこよつなことしあやつたけど、それでも嫌つて言つていいんだよ？」

優しかつた。

やつぱり志隆は優しかつた。
私に優しくしてくれた。

「寝よつか」

「・・・うん・・・・・・」

よかつた。

元に戻つてくれた。

努力が無駄じやなかつた。

存在が・・・無駄じやなかつた。

志隆はそのまま、タンスへと歩いていくと、新しい服を取り出して着た。

そして、少し躊躇するよつて自分のベッドへと入つていった。

見るも無残なモノの中に。

「志隆」

「何・・・時野？」

我ながら、人間らしい言葉遣いをした、と思った。

元々、今の表面意識上にある意識はジヴホルの魂ではあるが。

それでも初めて人體らしい言葉を言った

一・・・ありかと

その後、私達はもう一晩残ることになりました。

七〇 徒然草
和這日本文

とみなされるよひな感覚よりも、何より愛を感じ、そして、感じても

らえたことが嬉しかった。

起きた

そこに志隆の姿はない。

あるのは元ギウル。

背中から触手を生やした、本来のデギウルだつた

その皿はいつもの青色ではなく赤色に変化していた。

私を見つけるなり、触手で私をがんじがらめにし、頭に触手を刺

ੴ

しかし、皮膚に触れた瞬間に触手が止まる。

血が、鼻、脣、顎、そして首へと伝つていいくのがわかつた。

志隆の目が青や赤に不規則に変化している。

抗つてゐる。

デギウルに。

卷之三

声はもはや聞き取れず、塵でそれを判斷した。

そして、私を放すと扉を破壊し、上へと登つていった。

「A S T 反応確認！ 場所は・・・・・」
まだ顔もよく洗つていない。

私は最悪の場合でないことを静かに想つた。
「ち、地下監禁室です！」

「現在、専用工レベーター通路内を上昇中！」

微妙に安心できた。

やつと自分にけじめがついた。

敵だ。

アレは・・・敵だ。

今まであれほど悩んできたことが、こんなにも簡単に解決できる
なんて、正直言つて驚いた。

「通路内を完全封鎖して目標の侵攻を阻止！

一型機は木星へ四次元フィールドで強制移動！

二型機も金星へ！」

「了解！」

最善の策は夙くした。

・・・でも。

でも、死生物の力はそんなものじゃないかもしない。
太陽に投下したところで、どうにもならないのかもしない。
そんなことがふと頭をよぎった。

「通路内、封鎖出来ません！

目標がゲートを全て破壊しました！」

「目標を監禁室モーターから推測すると、かんざし・・・死生物Aで
す！」

・・・そう。

それしか思わなかつた。

「目標はエレベータを通過！」

「木星のA S T 反応消滅！」

キラカゼに出現しました！」

「目標のAST反応が」

突如、強烈な地震が指揮室を襲つた。

モニターが緊急事態を告げる。

「目標のAST反応拡大しました！」

「AST粒子砲はエレベータから地上までを貫通！

死者数十名以上と思われます！」

「デルが移動を開始しました！」

「四次元フィールド、開きません！

外部からの干渉で、空間が固定されています！」

驚いた。

死生物が本気を出せばここまでのことができる。
人間の力がここに全く存在していない。

やはり、弄ばれていたのだ。

鼻から死生物は人間と戦うことに対して、そんなに強い意志は持つていなかった。

愕然とした。

私達にできることが、阻止することができない。

指揮をする意欲を失つた。

無駄だと思った。

「指揮官！ 指示をお願いします！」

「もう時間がありません！」

「美月指揮官！」

私は完全に体の力を抜かされ、何の感情も持たずに椅子にいた。局長や指揮官としての想いや、死生物を倒すことへの想いや、志隆を止めたいという想いが、絶望に埋め立てられていた。

こうなつたらもう、死ぬしかない。

志隆とはもう無理だけど、先輩と一緒にいたいな。

「シキカンドコニイカレルノデスカ」

「シキカン」

言葉から意味が完全に抜け落ちて、単なる音として耳に伝わって
くる。

それは本当に意味のない物だった。
自分の欲のためだけに行動する、といふ、一番したかったことが、
出来ていた。

時野にもう少しいろいろ言つておきたかったな。
でも、もう体を動かすことはできなくて。
心身共に擦り切れる寸前まで来ていた僕はついに乗っ取られてし
まつた。

いろんな人とか救つてきたけど、結局全部意味なかつたんだ。
縦に伸びた穴を抜けると、そこにデルがいた。

「待たせたな。俺」

そうデルが言つたのがかすかに聞こえた。

どうする・・・・・

この状況よりも、指揮官がいないことが何よりもひどかった。
せめて戻つてくれれば・・・・・

「どうするの?」

桜が言つ。

「待つ意味は無いだろ?」

A E Lを発令するしかない。

たとえほとんど意味がないとしても、「だ

胤が言つた。

「でも、防衛庁の許可なしで」

「日本政府なんて、今は役立たず。

これは世界の問題」

屍が言つた。

「澪、やるしかないよ」

「零・・・・・」

深呼吸をする。

今は一番年上の私がしつかりしないと。

「みんなも、それでいいの？」

うなずく。

行かなきや。

少しでも止めるために。

「A E - 発令！ レオム量産機の搭乗を許可します！」

指揮室が変形し、ほとんど点いていないモニターが出てくる。

・・・止めないと。

「全機カタパルト固定完了！」

わずか百機弱の量産機。

何が出来るのかはわからない。

でも、やるしかない。

「レナ、頑張つて」

「そんな寂しそうな声で言わないでよ。

死んじゅうみたいじゃない」

あきれるぐらいに普通だった。

「死亡フラグ、つてやつか？」

「清輝は黙つてて」

やつぱり怖いんだ。

死ぬのが。

「全機射出！」

カタパルトが起動した瞬間だった。

「デルのA S T 反応拡大！」

「カタパルトは止めないで！」

死ね。

そう言つてゐるようにしか自分でも思わなかつた。

「・・・先輩」

「み、美月！？ どうしたんだこりんなとこひでー。」

当たり前だと思つ。

さつきA E Lが発令された。

私も招集されるべきだつたんだうけど、それなかつた。
たつた百機で何ができるつていうんだ。
ばかばかしい。

「・・・美月？」

先輩の胸に静かに飛び込む。

先輩は優しく私を抱きとめてくれる。

先輩の胸は私のとは違つて本当に大きくて柔らかい。
改めてそう思つた。

「ど、どうした？」

「先輩の・・・おつきくて・・・すじく柔らかいです
そのまま体重をかけると、すんなりと先輩はベッドに倒れこりんだ。
触つているだけで興奮してくる。

「先輩・・・いなくなつた者同士・・・慰めあいましょ
唇をゆっくりと重ねていく。

こんな終わり方も、悪くないなあ。
・・・でも。

こんなことで終わらせてしまはうえなかつた。

「・・・？」

ぼーっとした体に感じる衝撃。
私は壁に叩きつけられていた。

先輩が、私を殴つた。

「馬鹿かお前は！！」

怒られた。

初めて。

「男がいなくなつたぐらい、どうしたつていうんだー！

見損なつたぞ！！

趣味趣向はこの際関係ないが、人間として最低だ……」

耳に先輩の声が響く。

でもそれ以上に体と心に大きく響いた。

「今すぐ戻れ！ 指揮官だろうが！」

・・・私、馬鹿だ。

何やつてたんだろ。

「あ、ありがとうござります！」

走った。

私の場所へ。

私がいる場所へ。

「・・・自分も人のことなんか言えないくせに、美月に説教面か」

でもまあ、きっと良かつたんだろうな。

美月には最後の薬になつたかもしれない。

私と寝ても、それはそれだが、きっと美月はそっちの方が良かつただろう。

思えば私も間違いを犯しかけたときがあつたな。

あいつと同じ、失つたとき。

澪の説教は、今でも忘れない。

弱いな。人間は。

愛が欲しければ何でもいいんだから。

愛がなくても、触れ合つていればいいんだから。

それで満足なのが幸せなのかどうかは、私にはよくわからない。

でも・・・きっと。

負けることはわかつている。

「ごめんなさい。

謝りきれないけど、謝つておくわ

誰も反応はしない。

・・・忙しいからか。

「現在、百機中五十機が戦闘中！」

「他は機体破壊により戦闘不能です」

半数・・・・・

あと何分持つか。

「A S T 反応新たに確認！」

場所は、地下監禁室です！」

地下監禁室の様子が映される。

そこには針状の羽をまとった時野の姿があった。

「金星のA S T 反応消滅！」

キラカゼに出現しました！」「

「デル、時野神子、共にA S T 反応拡大！」

瞬間、すさまじい轟音が轟き、指揮室が揺れる。
何かに？まつていなければならぬほどだった。

「ち、地下監禁室のA S T 反応消滅！」

キラカゼ内に出現しました！」「

ほとんど壊れかけのカメラからの映像を映す。
時野が羽ばたきもせずに浮かんでいた。

意思疎通を行おうという気配は感じられない。
そして、黙つてジルの中に溶け込んでいった。
もう、私達ができることは何も無い。
やるべきことはやつた。

「A E L解除！」

各搭乗員は機体をその場に乗り捨ててもいいからとにかく逃げな
さい！

施設内の職員も全員退避を命じます！」

そうだ。

これでよかつたんだ。

あとは、あの二人が決めること。

まだまだ子供な、あの二人が・・・ね。

ゆつくりとまた志隆を見る。

装甲板もすでに剥がれ落ち、その姿は我々の主導者である「デギュルシス」となっている。

我々にとつて、人間は最も憎み、倒すべき相手。

そして、それを最初に決定したオヴィルシスとは全く違ひシナリオがここで繰り広げられている。

全ての判断を神崎志隆にゆだね、その問い合わせに対する解を我々の最終決定とする。

しかし、今判断を下そうとしているのは志隆ではなく「デギュルシス。

予定よりも長く志隆を監禁させておいた結果がこれだ。

精神が極限まで追い詰められ、「デギュル」の精神をその内に押し留めることができなくなっている。

多分、彼は中でなんとか「デギュル」を止めようとしている。

そのせいでもまだ「デギュル」は「再生の根」を張れないでいる。

生きとし生けるモノを全て消滅させてしまつものを。

「デギュル」の触手は元々はそのためのもの。

我々の中で一番最初に生まれた、もしくは生み出されたとされるのは「デギュル」であり、主導者であると同時に破壊神でもある。

志隆という「デギュル」にとっての不純物を取り除いたときの力は一体どれだけのものなのか。

そんなものを私は見たくは無い。

いや、違う。

私は力が見たくはないのではない。

取り除かれてしまうのがたまらなく怖い。

限りない命と限りある命であつても、求めたいものは仕方が無い。だから、救つてやらなくてはならない。

私の掛け替えの無い人間、神崎志隆を。

「ググゥアアアアアアア！」

「キイエエ！ ケルアアアア！」

ほぼ完全にデギウルが・・・か・・・・・

私が先に攻撃をしかけると、デギウルは容赦なく光線を放つ。

避けずに腕を犠牲にして接近する。

腕が削られていくが、構つてはいられない。

瞬間、胸が燃え滾り、無意識に光線を吐き出す。

デギウルはそれを根を壁にして防ぐ。

止まれない私は壁に激突してそのまま撥ね返される。

腕の再生が間に合っていない。

よく見れば、既に一本の根を地面に突き刺している。

神崎志隆の崩壊が始まっている。

何ゆえ、彼にはそんな力があるのか。

何ゆえ、彼はそんな彼を選んだのか。

頭の中を瞬時に過ぎつて、思い出す暇もなく消えていく。

デギウルの放った光線を跳躍でかわすと、限りない羽の光線を放つ。

全ては根に防がれてしまった。

やはり、世界を取り込んだデギウルに私のような雑魚が敵うわけがない。

どうすればいい・・・・・

あんた。

時野神子が話しかけてくる。

本気、出せないんでしょ？

ええ。

次の言葉は読めた。

なら、私を殺して、本気で志隆を止めて。

搖るぎはない。

止めても無駄なのは簡単に想像がつく。

なら、遠慮なくやる。

次の瞬間には殺されるかもしれないのに、彼女は穏やかだった。

止めないのね。こんなに長い仲なのに。

止めても意味はない。

ま、そうだけどね。

仕方なく、彼女はそう呟いた。

じゃ、志隆を止めたなら、あんたのために死んだ女がいた、つてだけ伝えて。それと、あんたのこと、嫌いだから。

了解。

あつさりし過ぎただろうか。

でも、彼女にはこれがお似合いのかもしれない。
だからこそ、決着をつけなければいけない。

デギウルのように身体は変化しないが、確実に力が戻っている。
これが真の私だ。

だが、これを知られては意味がない。
一瞬でケリをつける。

懐に飛び込んだ。

そして、融合を開始する。

そのまま、デギウルの体におちていった。

「時野！　来てくれたんだね！」

「貴様、俺に何の恨みがある」

「あなたには恨みはない。志隆を助ける義務がある」

「小癩な。人間と恋人ごっこなどしているやつには言われたくはない」

「ええ。私と時野神子は神崎志隆を愛す」

「とき、の・・・・・」

「人間は殺したのか」

「志隆を助けるために死んでくれた。『めんなさい』

「・・・え？」

「何が助けるだ。お前こそ囚われにきたようなものだらうが」

「・・・ん」

なんだ。私、生きてる。

そつか、レールガン取ろうとしたところで叩き落とされたんだつけ。

隣には清輝・・・か。

せめて、大好きの一言ぐらい、言いたかつたな。

「清輝、聞こえてる?」

意味もなく通信をつないでみる。

予想通り、返ってはこない。

「私ね、あんたのこと最初から大好きだったのよ。死んでから言うのもなんだけど

私ね、あんたのことばっかり一日中考えてた。

食べてるときも、戦ってるときも、もちろん寝てるときだって考えてた。

どうしたら大好きって言えるのかな、とか、恋人になれたらどこ行こうかなあ、とか。

ほんとに、恋って人をバカにするよね。なんでだろ。

有りもしないこと考えて、妄想して自己嫌悪、みたいな?

わつけわかんない。でも止められないのよね、これが。

何にも、やんなくて、できなくて、考えるだけで。ひたすら想つてるだけで。

言葉つてなんだこんなに伝わらないんだろうね?

聞正在する? 清輝

「・・・・・」

思わずそう言つてしまつたあと、スピーカーから何かのノイズが

聞こえた。

「清・・・輝・・・?」

「ああ。聞こえてるさ」

うつわあ、死ぬ最後にものすつい恥ずかしいことしきやつた。

ま、いつか。遺言は叶つたんだし。

「で、お前が言いたいのはそれだけか?」

「まあ・・・だいたい。」これ以上話すと脱線するだけだから
清輝の笑い声が聞こえる。

「わかつてゐるな。でも、俺はもつとお前に好きって言いたいぜ？」

「ああ・・・そう

なんか力が抜けた。

結局、こんなオチかあ。

「じゃあま、やらなきゃならない」と、やりますか

清輝のレオムが腕だけでゆっくりとレールガンに近づいていく。
「わかつたわ

もう少し早く言つてればなあ、なんてよく思うことよね。

私達はほぼ同時にレールガンをとると、私が銃を握り、清輝が腕
を支えた。

「俺達夫婦の最初の共同作業、やりますか！」

「おうよつ！」

「そう。私達に最後なんてない。

これからも、ずっと続していくんだから。

「志隆！」

「時野！」

僕達がデギュルに抱きつくようになってしまったしがみつく。

「何をする！」

「誰でもいいから早く撃つて！」

時野も、動いているレオムには気付いてたみたいだつた。
そのまま僕達の力でデギュルを体の外へ引っ張つていく。
そして、デギュルの力をありつたけ抑え込む。

「俺を撃つたとしても意味はないぞ！」

「ここまでされたんだから、痛い目ぐらい見てよねー。
銃口がこっちを向いている。

「志隆」

時野が僕の手を握る。

怖がってはいない。

僕も怖くはない。

「時野。 ありがとう」

「デル、 消滅です！」

歓喜に包まれる指揮室。

部屋には残っている職員全員がいた。

「まあ、 やつたな」

「志隆と時野神子のおかげです」

「ま、 負けには変わりはないが」

モニター上には計測できないほどのかたくさんのAST反応。ついに負け……か。

「みんな、 あとは好きにしてくれ。 解散だ」

先輩がそう声をかけると、みんなは各部屋で散つていった。覚悟はできているようだった。

「報告は別にいいだる。 せ、 お前も好きにしてくれ」

残つてこるのは澪オペレーターだった。

「私は……指揮官の元にいます」

「そつか……まあ、 どうでもいいだろ。 わーて寝るか」

先輩は床に横になつた。

「えー、 寝るんですかあ？」

「最後くらい、 ゆっくりさせてくれ」

「いつもゆっくりしてるじゃないですか。 働きもしないで給料もらつて」

「こいつう。 言いたいだけ言つて終わるなんて卑怯だぞ」

「せんぱあい、 痛いですよお

「そうですよねえ、 だから最近、 おなか周りとかもマズくなつててるんですよ?」

「澪まで言つか!」

「し、 指揮官痛いですよお

「…

「ふつ・・・はは。

はははははは

ははははは

ははははは

ははははは

またあいつはここにいたわけか。

「ジヴェルまた聞いてるのか？」

「オヴィル・・・か」

ジヴェルはまたCDラジカセを聞いていた。

こいつは本当に物好きだな。

私はジヴェルの横に寝ると、何となくつぶやいた。

「地球はやはり、住みよいものだな」

「お前は人の体には慣れたか？」

私達は地球に済みやすい人の体になつて生活していた。
もちろん、私も高校生ぐらいの体ではあるが。

「まあな。お前の方がはるかに年配ではあるがな」「そうか」

鳥が空を飛んでいく。

川の流れが、耳に心地いい。

「お前は・・・人間が絶滅してどう思う？」

「間違つているかどうか、ということか？」

私が行つたことだ。間違うはずがない

「だろうな。俺もそういうと思つた」

変なことを聞いてくる。

あいつらしくもない。

「俺は・・・少し残念だな」

「何がだ？」

そう言つて、音楽をまた聴き始める

「音楽が・・・もつないことだな」

・・・ベートーヴェン作曲「交響曲第九番」

か。

(後書き)

どうも。鯖味噌汁です。

今回は、元々考えていた展開をあえて晒してみました。

本編をじらんになつていいのなら、少しあはわかりいただけるか
と思います。

ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8563f/>

神創兵器エレクシエスト-truth-

2010年10月8日15時16分発行